

2012年1月29日

M1 倉持 定男

小倉ゼミの運営について

小倉ゼミの運営について、ゼミの狙い、方法などを記す。

小倉ゼミは「論文づくりの方法論」を学ぶゼミである。これは放送大学大学院が論文指導を行うものであることから当然である。「論文づくり」といきなり言っても、文章の書き方も、社会人の経験が長くても全く理解できていない。むしろ社会人の経験が長いから、思い込みで文章が書けていると思いついていていい。論文づくりは、外形的にも見た目が見やすいかから、ものの見方、聞き方、読み方、話し方、書き方、さらに本質をどうとらえるかということまでよく考えて進めなくてはならない。

論文づくりの方法論をどう学ぶか、これは、ゼミの講義の中でも、再三、触れられることであるが、話を聞くだけでは分かったつもりにはしかならず、実践の中で体得することが必須である。体得とは、日常の細かい所作のレベルの積み上げから、小倉ゼミで実践しているフィールドワークのような大きな取組みまでさまざまなレベルで行う。

具体的な運営は、大きくは、月に原則3回行われる学習センターでのゼミと、フィールドワークに分かれる。学習センターでのゼミのプロセスは、事前には提示された宿題の回答の提出、ゼミ本番での学生相互の検討と先生からの講評と指導、ゼミ報告（これは出席者の誰かが書く）という流れになる。

月3回のゼミの位置付けであるが、第1ゼミは、運営の基本のもので、総合的な意味合いをもち、宿題もこのゼミに対して出される。テーマも見た目はさまざまであるが、ものの考え方を問題にしていることでは一貫している。宿題の検討は、論文づくりをする上での具体的な例示となっている。論文づくりで注意すべき具体的な事例として、宿題の目的やものごとのとらえ方を考えるとよい。第2ゼミ、第3ゼミは、第1ゼミの実践編ともいえるべきもので、各人の論文のテーマなど個別のテーマを取り上げ、先生のご指導をいただく。

フィールドワークは、企業、団体、自治体などの実態を調査するために、実際に訪問する試みである。これは、その当日だけガイドに従って見学に行く観光ツアーではない。事前の資料の読み込みから相手先との訪問の交渉、スケジュール調整があり、学生側のスケジュール調整や分担した役割などさまざまなものをこなす。訪問は1日から3日程度であるが、訪問後も相手先へのお礼状の発送から調査報告書のまとめまで、一つのツアーを仕上げるには数ヶ月かかる。小倉ゼミでは、経営ということを大きな意味でのテーマにしている。経営は実際に動いているものであり、現場を見ることは経営の学習の最大の要点で

もある。また、事前準備から事後のまとめまで行うことは非常に負荷がかかる。特に通信制大学院で、全員が集まる機会は非常に少ない中で進めるのであるからなおさらであるが、先生のご指導のもと、学生で一連の流れを行うことは、会社の中などで協働で何かを行うことの貴重な訓練にもなる。学生各人の修士論文のテーマは、直接フィールドワークでの訪問調査とはつながらないことが多いが、フィールドワークを実際に行うことは論文づくりに役立つ。成果物ということを考えても、大学院の成果として直接見えるものは、各人の修士論文であるが、フィールドワークの報告書も大学院の成果としてはっきり示せるものとなる。

個々の修士論文のテーマについては、ゼミで取り上げられることもある。特に第2、第3ゼミのテーマとなることも多い。さらに、これだけでは不足する場合は、先生にお願いして個別指導の時間をとっていただくこともできるので活用するとよい。非常に知見が広がる。

この1年間の小倉ゼミでやってきたことを書いてみたが、これも固まったものではない。第2、第3ゼミも昨年7月から始まったばかりである。これからも進め方は変わっていくはずであり、変えていける。小倉ゼミの運営と得るべき最後の成果は、どのようにゼミに向かいあうかによるものと思う。

月3回のゼミは、全回の出席はかなりの負担であり、遠隔地で頻繁にゼミに出席できない学生もいるが、第1ゼミだけでも出席したほうがよいと思う。フィールドワークもすべてをこなすのはかなりの負担であるが、事情の許す限り、積極的に小倉ゼミへの関与をしてさまざまな成果をあげたほうがよいと思う。

以上